舞踊創作段階の研究

——舞踊創作における伴奏音楽の問題——

村 浦 と く*

(昭和42年5月26日 受付)

A Study on Creative Process of Dance

——Problems of A Complying Music in Creation——

Toku Muraura (*Saitama University*)

This study tries to analyse the effects of music to the movement image when a dance was created with the music as the stimuli and motives.

The first experiment was conducted to observe the images brought by three asen-tuated musical-construction, and in the second experiment, one of those three tunes was chosen to examine how its patterns of musical construction influences upon the creative process of a dance.

(Research Journal of Physical Education, No. 1, Vol. 12, 64~74, 1967)

芸術創作においては、一般に Image を創りあげることがまず必要である。これは創作舞踊の場合においても同様である。Image は現実的ではないにしても、一般的な幻想とは異なり、より具体的で鮮明なものである。Image の構成は想像力のみでは不可能であつて、体験という要素を通すことによつて、可能になる。特に舞踊体験を通したものの Image 構成は、単なる運動体験しかもたないものにくらべて形と動きの点において、より素晴らしいものになるはずである。

舞踊的運動を行う場合、音楽を刺激にすると文学や美術の場合と異なり、直ちに動きに結びついてゆくという点がきわめて特徴的であるといえよう。このような観点からまず第一に即興舞踊を行う場合の伴奏音楽に関する問題を取りあげ、次にその結果にもとづいて、音楽を刺激とした場合の舞踊的 Image 構成の傾向に関する問題について実験的研究を行つた。即興的舞

踊の練習は、舞踊創作の基礎をつくるという意味において重要であるし、その場合の伴奏の音楽構造を検討することも、そこに生れてくる表現運動と音楽の関係から舞踊的 Image 構成における音楽の役割を知るうえに重要なことと思う。

第一実験はピアノのメロディー、リズム、ハーモニーによる特徴のある三種類の構造をもとにした演奏も簡単に出来る即興曲により、それより受けた感じの即興的表現を行わせ、どのような Image を持つかについて考察した。

第二実験は第一実験で行つた一つの音楽構造をもつたものをえらび、これを刺激として舞踊の創作をさせ、その Image 構成過程を考察した。

実験の手順

(1) 対 象

埼玉大学附属中学校、朝霞中学校、大宮市立植竹中学校の三校より1年269名、2年262名、3年235名。

* 埼玉大学教育学部体育学研究室

埼玉県立浦和第一女子高校、浦和市立高校、
埼玉県立川越女子高校の三校より1年234名、
2年264名、3年164名。

(2) 期間 昭和39年5月

(3) 方法 Aの音楽構造をもとにした即興曲(64拍)を演奏し、それを繰返し、刺激として与えながら約10分間即興的に踊らせ、そのあとで調査用紙にその曲の感じと、そこで表現した踊りにふさわしいと思う題名を考えて記入させた。

同様の方法でBの曲、Cの曲についても実施した。曲の感じについては、動きのImageがわかるように自由に記述させ、その中より曲の感じを表現していると思われる言葉を選び出した。(以下表1.2.3)

結果と考察

(1) 各曲に対する感じ(質問①)について調査した結果は表1、表2、表3に示したものである。

イ. Aの曲では楽しい、静か、のどか、などの感じが多い。

ロ. Bの曲ではAの曲と相反し、暗い、さびしいの順である。

ハ. Cの曲は激しい、恐ろしいが多い。

以上のように、概してAは明るい感じ、Bは暗い感じ、Cは緊張した感じとしてそれぞれの特徴が表れている。

(2) 質問②では曲を刺激して即興的に踊った場合の題名を書き込ませたのであるが、それ

表1 Aの曲の感じ(%)

学 年	感 じ	明るい	柔かい	すがすがしい	静か	楽しい	のどか	清らか	やさしい	さわやか	軽やか	ゆるやか	美しい	その他
中 学 1 年		7	9	2	12.5	13	11.5	10.5	4	8.5	5	7.5	5	—
中 学 2 年		13	2	12	19	16	9	3	2	3	3	2	5	—
中 学 3 年		9	6	4	11	13	14	5	4	4	3	6	12	—
高 校 1 年		11	2.5	2	12	12.5	15	9	4	5	15	1	5.5	—
高 校 2 年		13	1	9	11	11.5	13	4	2	4	10	9.5	6	—
高 校 3 年		11	2	10	8	11	16	9	4	3	8	10	2	—

表2 Bの曲の感じ(%)

学 年	感 じ	重い	力強い	悲しい	苦しい	おどろかしい	静か	恐ろしい	暗い	寂しい	勇ましい	たくましい	不気味	その他
中 学 1 年		13	6	11	7	1	8	10	18.5	12	2	0.5	6	5
中 学 2 年		10	10	13	3	0.5	8	11	20	12	0.5	—	7	5
中 学 3 年		18	14	8	7	1	3	9	18	8	4	2	7	1
高 校 1 年		23	6	6	8	2	5	8	28	9	1	—	2	2
高 校 2 年		23	6	9	7	1	4	11	23	5	1	1	3	6
高 校 3 年		11	11	8	16	4	5	15	17	2	1.5	4	2	3.5

表3 Cの曲の感じ(%)

学 年	感 じ	激しい	恐ろしい	勇ましい	あわただしい	苦しい	不気味	暗い	力強い	さわがしい	静か	そう快	おどろかしい	その他
中 学 1 年		21	14	5	12	4	3	2	4	10	3	10	8	4
中 学 2 年		32	22	5	5	3	4	4	5	9	1	5	2.5	2.5
中 学 3 年		24	15	5	14	4	5	3.5	9	8	2	6.5	1	3
高 校 1 年		42	15	4.5	4	3.5	3	1.5	8	9	1.5	3.5	3	1.5
高 校 2 年		35	24	2	5	5	2	3	8	5	2	7	1	1
高 校 3 年		39	13	4	6	4	3	3.5	9	10	1	4	1	2.5

表4 題名の分類

学年	題名		人 間			動物	物 体		自 然				感情	知覚 観念	事象	計
	曲	感じ	動作	人物	幻想		動く もの	動かない もの	水	草花	風	その他				
中学 一年	A	明 暗	5.0	2.0	2.0	6.0	0.5	3	40.0	10.0 0.5	8.8	0.5	0.5	21.0 0.5		99.0 1.9
	B	明 暗	0.5 12.5					0.5 15.0		0.5 4.0			0.5 16.0	1.0 31.0		2.5 97.5
	C	明 暗	1.0 7.0	1.0 2.5	1.0 10.5	1.5 1.0		3.0 10.5	1.5 2.0	0.5 1.0		1.5 5.0	0.5 9.5	1.0 10.5		11.5 88.5
中学 二年	A	明 暗	5.0	1.0 0.5	2.0	4.0		3.5	36.0 0.5	9.5	7.0	7.0	1.5	22.0 0.5		98.5 1.5
	B	明 暗	0.5 12.0						1.0 2.0	0.5 4.0		0.5 3.0	2.0 19.0	0.5 31.0		5.0 95.0
	C	明 暗	1.0 11.5	1.0 2.5		0.5 2.0		0.5 11.0					0.5 15.5	2.5 10.0	10.5	6.0 94.0
中学 三年	A	明 暗	4.0	3.0	2.0	1.5	0.5	3.0 0.5	42.0 1.0	6.0 1.5	4.0 0.5	5.0	2.0 1.5	21.0 1.0		94.0 6.0
	B	明 暗	1.5 14.0	0.5 6.0		0.5 2.0						0.5 6.0	0.5 22.0	2.0 22.0	3.0	5.5 64.5
	C	明 暗	3.0 9.0		0.5 4.0	1.0 3.0		1.0 12.0	1.0 8.0			1.0 2.0	2.0 15.0	2.0 14.0	7.0	11.5 88.5
高校 一年	A	明 暗	5.0	3.0	5.0	7.0	1.0	3.0 0.5	34.0 1.0	9.0 0.5	11.0		1.0	17.0 2.0		96.0 4.0
	B	明 暗	4.5 18.5	0.5 3.0		0.5 3.0	1.0 1.5	2.5 4.0	0.5 1.5	1.0 3.0	1.0 4.0		1.0 16.0	2.5 25.0	0.5	15.0 85.0
	C	明 暗	1.0 7.0	1.0 4.0			0.5 4.0	0.5 15.0		0.5 1.5			1.5 16.0	1.5 17.0	8.0	6.5 93.5
高校 二年	A	明 暗	3.0	3.0	1.5	3.0		1.0 0.5	26.0	11.0	3.0 1.0	5.0	1.0	40.0 1.0		97.5 2.5
	B	明 暗	0.5 16.0					1.5 7.0						1.0		3.0
	C	明 暗	3.0 4.0	1.0 0.5		0.5 1.0		1.0 10.5	1.0 1.0			0.5 1.0	2.0 26.0	3.5 27.0	8.5	11.5 88.5
高校 三年	A	明 暗	5.0	2.5	6.0	2.0	0.5	3.0	26.0 2.5	13.0 0.5	1.5	3.0	2.0 1.5	29.0 1.5		94.0 6.0
	B	明 暗	0.5 16.0					0.5 6.0		0.5 3.0		1.0		0.5		4.5
	C	明 暗	0.5 9.0										5.0 27.0	5.0 34.5	11.0	10.5 89.5

については、それぞれの題名を次のように分類した(表4)。具象的なもの(人間の日常動作、幻想的なもの)、動物、物体(動くもの、動かないもの)とに分け、自然は水、草花、風、その他にわけ、抽象的なものを感情知覚観念的なもの、事象とに分け、さらに全体を明と暗とに分類した。明暗の分類例はつぎにあげたようなものである。

明——小川のせせらぎ、そよ風、春の精など

暗——夜の海、台風、悪魔など

実験1によつて以上のような結果をみたので次に刺激として与えた曲について考察してみる。

(3) Aの曲

Aの音楽構造による即興曲は、明るく、のどかな感じがするため、舞踊的 Image は春に関するもので、しかも動きやすいと思われる水に関するものが多い。

例 川の流れ、春の風、のどかな目ざめ、春の妖精など

●音楽の構造

i 三点音を中心として、右手を分散和音または三和音を奏する。(左手でメロディーを奏する)

ii 副三和音を主として使用する。(短三和音)

A の 曲

B の 曲

iii 速度 1=112 ALLEGRETTO (やや快速に)

(2) Bの曲

Bの音楽構造は低音のゆつくりしたリズムが一定に持続されるため、重苦しく、圧迫感を覚え、非常に暗い感じの Image がもたれた場合が多い。

例 悲しみ、別れ、恐怖、祈りなど

●音楽の構造

下一点ほの位置で左手に一定のリズム ♩ ♩ ♩ を持続させる。

ii メロディーはなるべく変化を少くした。

iii ハーモニーは出来るだけ変化を避けた

iv 速度 ♩=48 LARGO (巾広くゆるやかに)

(3) Cの曲

Cの音楽構造は、忙しい、いらいらした、落着かない、不安定な感じを与えるため Image においても、悲痛、憎悪などの激しいもの、あるいは事象としては、火事、難破船など破壊的なものが多い。

●音楽の構造

i 不協和音の低音(ひらがな音以下) 高音(二点音以上)を三オクターブ以上離して奏す

結果と考察

1. 題名についての傾向

一般に曲と表現活動との関係は、曲が受け入れられ、感情移入の活動が行われ、その感情がある素材を通して客観的に表現されるという過程をとる。舞踊の場合はこの素材が身体であり、そのために、表現技術上の制約が生まれる。たとえば、形のない動きのないもの即ち思想的なものを表現する場合は、動きの Image 構成が難かしくなる。したがって、動きを模倣しやすいものを取材することになる。最も模倣しやすいものは人間に関するものを主題にしたものである。人間を主題にしたものは日常動作（職業的なもの、作業的なもの、社会年齢層的）、感情動作（喜び、悲しみ、怒りなど）などに分けられる。

その他、動物、自然などを主題にしたものが多くなっており、表 (5) に示した通りである。

表 5 主題についての傾向 (%)

学 年	題 名	人物	動物	物体	自然	感情	知覚 観念	事象
小 学	5 年	57.9	3.5	8.8	22.8		7.0	
	6 年	54.0	8.9	4.0	18.5	10.5	3.2	0.8
中 学	2 年	34.8	1.1	6.7	12.4	20.2	22.5	2.2
	3 年	46.2		3.8	16.7	15.4	15.4	2.6
高 校	2 年	32.8	21.8			25.2	17.6	2.5
	3 年	18.8		3.5	3.5	47.1	25.6	1.2

2. テンポが遅く、重い、圧迫感を覚えさせる曲の特徴が創作した場合の Image 構成に如何に影響したかについて、特に中学二年生の場合から考察してみたいと思う。

中学二年では被験者 89 名中 71 名が主題を人間に関するものを選んでゐる。その内訳は表 (6) に示したものであるが、総て曲の感じから動きの Image が創り出されていることが分るのである。

次に表 (6) の主題としたものの表現内容について分析をしてみる。

(a) テンポ感からくる感じをまとめたものが次の表 (7) の重量感と表 (8) の軽妙感とで

表 6

		人 数	百 分 率
悩 囚	み 人	9 人	12.67%
		8	11.26
力 仕	事	8	11.26
	考 え	7	9.87
ど れ	い	6	8.45
	や み	6	8.45
暗 悲	し み	6	8.45
	魔	3	4.22
悪 寂	さ	3	4.22
	死	3	4.22
疲 旅	れ	3	4.22
		2	2.81
絶 望	怖	2	2.81
		2	2.81
恐 力		1	1.40
	だ え	1	1.40
も 不	安	1	1.40
		1	1.40

表 7

		人 数	百 分 率
重 量 感	重 々 し く	57人	22%
	重 暗 い	22	11.95
	中 重 苦 し い	14+(1)	8.06
	軽 重 く 暗 い	11	5.97

表 8

			人 数	百 分 率
軽 妙 感	多			
	中	だ る い ゆ つ くり	1 3	0.54 1.61
	小			

ある。

(b) メロディー、ハーモニーの内容からくる感じとして次の表 (9) の悲哀感と表 (10) の虚脱感をあげることができる。

(c) 一定のリズム ♪♪ を絶えず持続させたことにより次の表 (11) の生活意志感を示すことができる。

表 9

			人 数	百 分 率
悲 哀 感	大	疲 れ た	4 人	2.17%
		悲 し そ う	8	4.34
		苦 し い	9	4.89
	中	寂 し い	13+(1)	7.53
	小	ゆつくり暗い	1	0.54

表 10

			人 数	百 分 率
虚 脱 感	大	絶 望 的	5	2.71%
	中	不 安	3	1.63
		の つ そ り	2	1.08
	小	不 気 味	2	1.08

表 11

			人数(人)	百分率(%)
生 活 意 志 (肯 定)	大	恐 ろ し い	8	4.34
		圧 迫 感	7	3.80
	中	力 強 い	8	4.34
		厳 粛	2	1.08
	小	静 か	2	1.08
		忍 耐	2	1.08

なお表現内容に歩く、歩き乍ら(悲しい気持を歩きながら)など歩の動きを特に記してあるものが31名おり、一定のリズムが強く意識されるものと思われる。

3. 即興的舞踊は感じたままを何となく踊る

のであるが、作品創作の場合には、中心となる動き(モチーフ)を具体的に練り上げ、内容にふさわしい形式でまとめあげなければならない。この結果が即興的舞踊と作品創作とのImageの相異となってくるのである。以下は即興的舞踊の場合と、作品創作の場合の結果、決定した題名および、内容を比較検討するため、それらの変化を次の4つの場合に分類して整理した。

- (1) 題名内容ともに変化したもの
- (2) 題名だけ変化し、内容はそのままのもの
- (3) 題名は変化せず、内容のみ変化したもの
- (4) 題名、内容ともに変化しないもの

(1) 題名と内容の変化したものの傾向

題名も内容も変化したものの原因の多くは動きから離れた文学的なImageを持つたもの、或いは舞踊的Imageであつても、現実の運動で表わしてみるとむずかしすぎて無理なため、モチーフがつくれず、題名や内容の変化せざるを得なくなつた場合などである。

例

{ 題名 夜明け(自然)
内容 夜が明けてゆく様子

これは抽象的な動きのない題名であり、内容としても夜明けの情景の描写のような具体的なとらえ方をしないため、動きのImageを実際に把握することの困難さがわかり、変化して次のようなものになつている。

表 12

% () 内は実数

学年	題 名 変化した	内 容 変化した	題 名 変化した	内 容 変化しない	題 名 変化しない	内 容 変化した	題 名 変化しない	内 容 変化しない
小学5年	94.7	(54)		0	1.8	(1)	3.5	(2)
小学6年	54.0	(67)	5.6	(7)	6.5	(8)	33.9	(42)
中学2年	61.8	(55)	4.5	(4)	3.4	(3)	30.3	(27)
中学3年	20.8	(16)	10.3	(8)	2.6	(2)	66.7	(52)
高校2年	25.2	(30)	3.4	(4)	4.2	(5)	67.2	(80)
高校3年	29.4	(25)	5.9	(5)	2.4	(2)	62.4	(53)

{題名 波 (自然)
 {内容 波のゆれる様子
 あるいは
 {題名 不安と幸福の追求 (感情)
 {内容 頭にこびりつく不安とそれを乗り越えて幸福を求めて長い旅に出る
 が変化して、
 {題名 岩にぶつかる波 (自然)
 {内容 大波、小波となつて岩にぶつかる
 などである。えれは波の表現は動きとして表わしやすいため、変化したものと思われる。小学校においては変化したものが、94.7%あり、中学三年以上は変化しないものの方が多い。とくに高校二年は67.2%変化してない。

④ 学年における傾向

(a) 小学校五年 (表13)

変化したものが94.7%で(1)では1.8%あった感情表現のものが全くななくなってしまう。人物から人物への変化が29.8%の最高である。

例えば、山登り→奴隷に変化したもの。

暗い森の中を行く→奴隷。などで変化した理由は、暗い森の中を行くなどの内容は、感情表現に類するものである。したがって奴隷の労働、作業動作などの方が、具体的な動きをとらえることができる表現しやすい人間動作に変つたものと思われる。

次に多く見られるのが、自然から自然へ変化したもの7%である。

例えば 嵐→木の葉の踊り、などである。変化した理由は踊りやすいからというのをあげている。感情から人間に変化しているものでは、例えば、悲しい日→泥棒、などで、1.8%を示しており、泥棒は作業動作のため、動きがすぐ浮んで来るので、踊りやすいという理由である。暗い曲の感じや、遅いテンポをとらえそれにふさわしい題名へと変化しているのがわかる。

表 13

小 学 校 5 年

①は即興の場合の題名

2	1	人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
		人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
③は作品創作の場合の題名	人 物	29.8	1.8	5.3	3.5	1.8	7.0	5.3	54.5
	動 物	1.8							1.8
	物 体	3.5			3.5			1.8	8.8
	自 然	5.3			7.0		7.0	3.5	22.5
	感 情								
	観 念	1.8				1.8	3.5		7.1
	事 象								
合 計		42.8	1.8	5.3	14	3.6	17.2	10.6	94.7

(数字は%)

(b) 小学校六年

変化したものの54%で、その内訳は人物から人物に変化したものが、16.9%である。

例えば、盗賊→けんか、などのように人物を主にしながらも、日常生活において経験が多く直接の動作から発展させてゆけるようなとらえやすいものに変つているのである。第二位は自然から自然に変化したもので、例えば、探検→入どう雲、などであり、モクモクとした動きが動作としてとらえやすいなどが理由である。小学校五年が感情表現が全く表われないのに反し、六年生では第三位の6.4%を示し、感情的

表 14

小 学 校 6 年

①は即興の場合の題名

2	1	人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
		人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
③は作品創作の場合の題名	人 物	16.9	0.8	1.6	4.0	1.6	3.2		28.
	動 物	4.2							4.2
	物 体	1.6					0.8		2.4
	自 然	3.2			8.1				11.3
	感 情	2.4			1.6	1.6	0.8		6.4
	観 念				0.8				0.8
	事 象	0.8							0.8
合 計		29.1	0.8	1.6	14.5	3.2	4.8		54.0

(数字は%)

な主題をとらえはじめていることがうかがえるのである。

小学校全体としての傾向は、人間の作業動作を主題にしたものに变化した場合が多く、その他自然が次いでいる。更に、経験の多いもの（自分の行為として、或いは観察の経験のあるもの、又、単に知識として把握したもの）が動きとしてとらえられていることがわかる。

(c) 中学校二年

中学二年では、題名、内容共に变化したものが61.8%を占めているが、そのうち物体から人物に変化したものが6.7%で最高を示している。例えば、古い立派な寺院→疲れ、に変化している。理由は動きにくいというのである。動かない物体は形の模倣は可能であるが、動きへの発展、即ち、物体の感じをとらえ、その特徴を表わした運動の Image を頭の中につくり、実際の動きとして具体化させることが困難なのである。第二は人物から人物へ变化したものの5.6%であつて、例えば、登山→奴隷、などである。これも小学生と同様に奴隷の日常の作業動作を主として行っているものであり、曲の感じから受ける重量感の影響によるものと思われる。二年生の特徴は变化した題名が種類別にみて分散していることであるが、感情に変化したものが小学生より多い点から、精神的な発達段階の一端を見ることができるようと思われる。

表 15

中学校 2 年

①は即興の場合の題名

2	1	人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
		人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
人 物	5.6			6.7	4.5		8.0	1.1	25.9
人 物									
動物				1.1		2.2	2.2		5.5
動物									
物体	1.1		1.1				2.2	1.1	5.5
自然	4.5		2.2	1.4	4.5				12.6
感情	1.1		1.1	1.1	3.4	3.4	1.1		11.2
観念						1.1			1.1
事 象									
合 計	12.3		12.2	7	10.1	16.9	3.3		61.8

(数字は%)

②は作品創作の場合の題名

更に、登山→悲しみ、に変化しているものなどは曲よりくる悲哀感の影響といえよう。

(d) 中学三年 (表16)

中学三年においては題名の変化したものは僅かに20.5%で、むしろ変化しないものが、66.7%もあることが、今までの学年と著しく異っている点である。变化したものの内訳をみると、人物から人物へ、自然から人物へ、又は感情から人物への三種類がいずれも3.8%を占め最高になつている。例えば、無言の行列→炎天の労働、などであり、この場合も小学校におけるように、動きの少い漠然とした主題のものより、具体的な作業動作の方が表わしやすいことが分るのである。

自然から人物へ变化したもので例えば、砂漠→奴隷、なども今までも述べているように人間の作業動作に変化させた方が表わしやすくなるという理由があげられるのである。なお人物から自然に変化したものが2.6%であり、その他は1.3%で分散的である。

表 16

中学校 3 年

①は即興の場合の題名

2	1	人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
		人物	動物	物体	自然	感情	観念	事象	合計
人 物	3.8				3.8	3.8			11.4
人 物									
動物					1.3		1.3		2.6
動物									
物体	2.6					1.3			3.9
自然	1.3	1.3							2.6
感情									
観念									
事 象									
合 計	7.7	1.3			5.1	5.1	1.3		20.9

(数字は%)

(e) 高等学校二年 (表17)

題名も内容も变化したものは、25.2%である。そのうち、人物から感情に変化したもの、自然から人物に変化したもの、感情から人物へ变化したもの、いずれも3.4%を占めて最高となつている。

例 兵隊の行進→孤独, 動きにくい事と前の題名では群舞でないと適当でないというのが理由である。

夕ぐれ→前進は, 漠然としていて動きがまとまらないから,

恐怖→労働, 動きにくいというのが変化した理由である。しかし, いずれの主題も, 音楽の感じをとらえた上での変化であることは言うまでもないことである。

表 17
高 校 2 年

①は即興の場合の題名

② は作品創作 の場合の題名	①							
	人	動	物	自	感	観	事	合
2	物	物	体	然	情	念	象	計
人	0.8	0.8	0.8	3.4	3.4	0.8		10.0
動								
物								
自	1.7			2.0	1.7	1.5		6.9
感	3.4				0.8	0.8		5.0
観	1.7				0.8	0.8		3.3
事								
象								
合 計	7.6	0.8	0.8	5.4	6.7	3.9		25.2

(数字は%)

(f) 高校三年 (表18)

題名, 内容が変化したものは, 29.4%で, そのうち感情から感情に変化した7.1%が最も多く, 感情表現に最大の関心を持っていることがわかる。

例 恐れ→絶望 感じ方が最初と違つたのが理由であり, 怒り→反抗は, 題が漠然としすぎたので変えたという理由をあげている。これらは即興的表現の場合よりも創作した場合の主題が激しさを増した主題に変つているのは音楽に馴れ刺激を深く感じたためと思われる。なお, 人物から感情に変化した3.5%がこれに次いでいる。

例 悪魔→苦しみ 独踊としては後者の題名の方が表現しやすく, 体験から動きが浮んでくるといのが理由である。

以上各学年ごとに題名と内容の変化の傾向について考察したが, 題名が変化した場合, 最初

表 18
高 校 3 年

①は即興の場合の題名

② は作品創作 の場合の題名	①							
	人	動	物	自	感	観	事	合
2	物	物	体	然	情	念	象	計
人	1.2			1.2				2.4
動								
物								
自					1.2			1.2
感	3.5	1.2	2.4	2.4	7.1	1.2		17.8
観	1.2			2.4	2.4	2.0		8.0
事								
象								
合 計	5.9	1.2	2.4	6	10.7	3.2		29.4

(数字は%)

に述べたように, 内容も当然変化している。それぞれの内容についての細かい例は, あげること省略した。以上の結果, 変化した多くの原因のうち, 最も多いのは, 動きにくいためというのであり, その他, 題名が漠然としていたとか, 又, 日常の学習形態がグループであつたため, これに適した主題を選んだものの, 実際の段階になつて独舞に適した主題に切りかえたなどである。

(2) 題名は変化した, 内容は変化しないものの傾向について。

非常に割合は少なく, 小学校五年生には一人もなく, 中学三年生の10.3%が最高である。

例

{ 題名 船→重労働, に変化した。
内容 船の中で奴隷が重労働させられている

{ 題名 象の歩み→重い足どり, に変化した
内容 象が, ゆつくり歩いている様子

内容にふさわしく題名のみを変えているということがいえる。この二つの例は重量感を共に受けとめており, 特に後者はリズムの影響が大きく左右していることがわかるのである。

(3) 題名は変化しないが内容が変化したものの傾向について

この場合まず第一に動き易いように内容が変

表 19 変化しないものの人数

学 年	題 名	人 間			動 物	物 体	自 然	感 情	観 念	事 象	計
		動 作	状 態	幻 想							
小 学 5 年		1			1						2入
小 学 6 年		10	1	12	5	2	6	3	3		42
中 学 2 年		3	1	2		1	5	5	8	1	26
中 学 3 年		18	3	4		2	8	6	9	2	52
高 校 2 年		17	8	1			15	21	16	2	80
高 校 3 年		9	4				2	22	15	1	53

えられている。例えば、うす気味悪い感じというのが、重々しくだるく動く、などに変り鮮明な動きの Image におきかえられている。第二は、内容が盛沢山であつたため中心の動きに内容をしばっている場合である。

例

{ 題名 戦争のむなしさと兵士の孤独
内容 荒野の描写と兵士の元気がない動きが、兵士の動き、のみにしぼられている。

(4) 題名も内容も共に変化しないものの傾向について

動きの Image のとらえ方が適切なため、変化がみられない場合である (表19)。

これは人間の動作や自然を主題にしたものに多くみられる。観念、事象などを題名としたものでも、内容には、動きのとらえやすい人間の動作などを選んでいため変化させる必要がないからである。

総 括

実験 (1) における、A, B, C. の三類型の即興伴奏のうち、A曲はのどかな明るい感じを与えるため、春に関する自然を題材とする Image が多く考えられる。C曲は不安定な激しい感じを与えるので、いらいらした忙しい事象などを題材とした Image が多く持たれ、さらにBの曲は暗い寂しい感じを与えるため、圧迫された人物の動作、暗い感情を表わした Image が多かった。

Bの音楽構造をもとにして作曲した音楽を刺

激として創作させた場合には、即興の場合の Image とは異つた Image が多くみられた。

即興的舞踊は何となく動く Image 探索の過程である。これに対し創作舞踊はある一定のモチーフによつて形づくられるものである。したがつて同一の音楽のもとにおいて、同一人によつて創作される場合であつても、即興において選んだモチーフが創作の場合においては変わる場合もあろうし、又確定された主題によつて内容も変化する必要が出来る。逆に創作の段階において確定された主題による表現内容の変化が、以前の主題を変えてしまう場合も出来る。これらの関係は動きをとらえてみた場合具象的、抽象的なもの、及びこれらの組合せのものが主題及び表現内容の相互の関れんのもとにうつり変りを示すものをのべた次第である。更に以上の関係において人間の動作に変わったものが非常に多くなっていることは、表現の素材が身体であることと、創作段階では即興段階より更に深く音の特質を受け止め、その結果曲の重量感、非衰感などによつて影響されたものといえるだろう。

以上即興的舞踊、創作舞踊の場合の刺激として与えた音楽と、Image 決定について考察したものの一報告である。

(本研究は昭和39年度文部省科学研究費(総合研究)による研究の一部を担当して行ったもので、その一部は昭和40年8月25日第16回日本体育学会において口頭発表した)

参 考 文 献

- 1) 邦正美：舞踊
- 2) 渡辺江津：舞踊創作の理論と実際